

### (3) 次年度に向けて

3年間の研究を通して、子供たちも教師も生活科・総合的な学習の時間の授業への向き合い方が180度変わったと感じた。国語や算数等の主要科目とは違い、授業づくりに悩まされる教科になっていた。以前は、子供たちが学習したことをスライドにまとめて発表するだけの活動となっており、十分な学びが見られなかった。しかし、1年目に単元配列表を作成したことでそれぞれの教科とのつながりが見え関連させて指導するようになり、教科間の関連を意識した指導を行うようになった。さらに2年目には子供たちの思いを汲み取った単元づくりを丁寧にしたことで生活科・総合的な学習の時間の価値を少しずつ理解することができた。そして、3年目に入ると、学習指導要領の目標や子供たちの姿を見取ることの重要性等授業(づくり)に対する深まりや教職員間でのフィールドワーク、地域との連携等広がりが見られた。これらが大きな成果と言える。また、本校では意義の共通理解を図りつつ学年によって同じ材で進めているが、各学級の実態に応じてプロセスは違っている。よって、学び方や動画や紙芝居、CM制作、曲作り、ポスター、パンフレット等表現の方法に多様なものが生まれ、子供たちが肌で感じていたことも成果として挙げられる。

子供たちの思い・教師の願い・教材観を三位一体とし、単元の構想を描き計画を立てながら実践し研究を進めてきた。年間指導計画が教師側の仕事の段取りであるのに対し、単元配列表は子供側の学びの段取りと言い換えることができる。目の前にいる子供たちの思いを汲み取りながら、時には先導に立ってコーディネートし、時には問いかけや助言を送りながら伴走し、時には子供たちの力を信じ後ろからそっと見守り成長を喜び合う等教師としての様々な役割を教えてくれた3年間でもあった。また、子供たちと共に授業を創っていく楽しさも教えてくれた。

生活科・総合的な学習の時間は、日常生活の本質をつくり生きてはたらく大切な教科である。その可能性は、無限に広がっている。今後も子供たちに体験や経験(見えるもの)から材料を掻き集め思考し、見えないものに向かっていく未来の道を切り拓く助けや力となってくれるだろう。

この3年間の研究で得た数々のことを生かし、今後も単元配列表を使えるものとするよう毎年話し合いを重ね随時更新していく。実践済みのカリキュラム表には、様々な価値情報が付加されている。価値情報とは、教師が、子供たちの姿からどのような資質・能力が育まれているのかを見極め、子供と相談を重ね、計画を修正しつつ具体的な活動を展開した成果と課題である。「もっとこうすればよかった」「こういうこともできそうだ」という課題は、次年度の改善策につながる。カリキュラム表を1年限りとするのではなく、年度を越えて更新し続けることによって、学習過程が質的に改善される。それは言わば、子供と教師双方にとって真のやりがいのある活動を生み出す設計図となる。このことから、作成したカリキュラムを基に子供たちや教職員、地域の方々と共に更新し続けることで年度を経るにつれてより磨きのかかったカリキュラムとなるようにしていきたい。

次年度以降の研究については、本校の現状と照らし合わせながらこれからの未来を担う子供たちに何が必要なのかを多面的・多角的な視点から教職員間で出し合い決定し研究を進めていきたい。

### 参考文献

- ・田村学.授業を磨く.東洋館出版社.2015,p53
- ・田村学.カリキュラム・マネジメント入門.東洋館出版社.2017,p221
- ・松村英治.学びに向かって突き進む!1年生を育てる.東洋館出版社.2018,p79
- ・文部科学省.小学校学習指導要領(平成二十九年度告示)解説 生活科編.東洋館出版社.2017,p8
- ・文部科学省.小学校学習指導要領(平成二十九年度告示)解説 総合的な学習の時間編.東洋館出版社.2017,p8